

ダーリング夫人のキス

船越素子

ダーリング夫人には
だれにもあたえない
キスがひとつ
いつでも右の口もとにうかんでいる
ご亭主のジョージも
ウエンデイも 弟たちも
もらうことができなかったキス
決して大人にならない
あの少年だけが
風のようなあいさつをして
受けとっていくのだ
バリはどうして
彼の物語の最初に
あんなことを綴ったのだろう
10歳のわたしには
人生の不思議な烙印だった
それに夕餉の支度をする
母の口もとにも
たしかに
ダーリング夫人のキスが
うかんでいた

近ごろは鏡のなかに

ダーリング夫人の

慕情に似たちいさな蔭を

わたしの口もとに時折見かける

それを誰にあげるのか

いえ、あたえてしまったのか

わたしにもわからない

ただ 銀行家のダーリング氏には

端から無縁なことなのだ

株や配当には とても素晴らしい

知識と才能をお持ちですがと

作家はすこしだけ辛辣だから

そんなことには関わりなく

わたしの口もとに残る痕跡は

胸の奥でひりひりと

キスの行方を捜している

失われた記憶と 何かを 何ものかを

尋ねかねているのだった